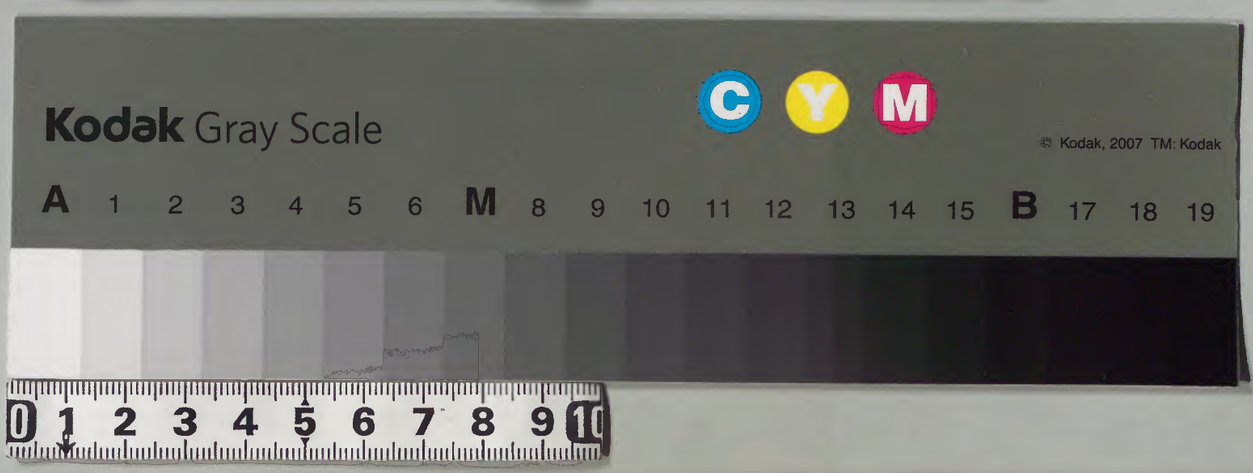
国立公文書館
National Archives of Japan



内閣文庫

東雅卷之二

筑後守従五位下源君美撰

地輿

地ツチ 義不詳 按するに國太古の諸小
國天小別して国必ずしも天神地神天都柱國
れ柱なるいふ義遠く皆ちうちうはなし
等の紀よみたる舊事紀古事紀
こいに又ハトコヨなるよあり舊事紀
乃地小天地未判なるときなるなる
あれとこもるまわるく三五曆紀淮南
子等ふみたる不と儻拓して老乃

内閣文庫

文とむさし地の方に漬むこと多間
敷ことなり土とゝ云ふ云てにい云ヒタチと
いふ皆是漬也（漬）袖ヒツミ袖ヒツミ袖ヒツミ袖ヒツミ
漬といふて云てヒチとゝいふ乾といふてヒルと
いふの方の方の方の乾とヒルといふハ日照の事（乾）
ふるとゝ云ふ又ハ乾とも云ふ倭名鈔ハ
埴の字漬ていふ二とゝいふ粘名と用て土
黄而細密用埴とゝ埴とゝ云ハ二とゝいふ
義詳なるす古語ハ二とゝいふ粘者
者のまゝにして二とゝいふ語情にて又と

いふ子とゝいふ又皆粘すの義
なるゝ説文ハ埴ハ粘聲とゝみ
もたれを京ハ黄土と呼ていふ
ものハ二とゝいふ其粘しるゝいふ似
なる埴とハ二とゝいふ脂とヤニとゝいふ凡そのと
塗ると又ルとゝいふ煉ると子ルとゝいふ糊とノリ
こゝいふ皆是粘者と義ハてなる又黄櫨
の字ハ二レとゝ漬ミとの黄掬木とゝ埴す
世ふハ三色とゝいふもの即ちハて黄色ハ
漬る赤也ハ土師の字ハ二レともハレとも

漢のことくハニシといふハシとハ同語なり又四事の日本紀ニ云ふ人皇天柂弓と云ふ左事記ニ天し波士弓ともいふものこと也ソチナシの末といふ小河寸桑の一半樓なれと柂といふ字みな山桑ノ木也山桑といハシといふも其木の色の黄なるにより也黄へて色黄の如くなる黄土ハニといふ其名ノ黄なるものを也ものゆもハニシといふハジとも云ふ土の字濱ハニといふ如黄土ノ名ふ

まて泥と土のまとハニといふこと

みえたり詰よかくのことく相違ていふ

般若

イハ萬葉集抄ニ詰よ家とイハも

織細といふ対ものへ

塵

チリとハ散し舊説ニチリヒチとハ

塵と泥と説いふ所服の説又一説ニチリ

とハ草木の摧もたるといふ土の風ニふかれ

てたりとハヒチとハ仏説の説ニハ塵泥

塵泥いつれともいふへしチリアリタ

ゆとハいふへしチリハ塵也アリタハ埃也

アは瓮語の夢よりそり又は腐之即
腐敗之地俗よりチリホコリのくりふを死し氣まて火中より起
ちりふる
泥
ヒチリコ 倭名抄よヒチリコ姫〻古比
チヒもいふを みたりヒチをいふを土之
リヒいふを語助之つ〻いふは人ナコるる
いふヌのこ〻ふ同し〻ふ 俗ホトロこいふ 其義不詳古事
紀よトロ、リ〻いふ
をふに滑とのふ イハロこもいひ〻る
イハともイへこも イホこもまる イハロ
こもイハホロこもいふ皆同し〻ふる

こみもたりのイハロ イハホロの口は並ふかるる
のりこれは解ふ
家圍るもたる古の所よハ巣よ構し穴ふ
居もを神 聖相繼て天とつ〻若代
廣ふの制如もりこも神とあるいイ
ハ井こいひ 井數と盤座ありいひ
〻代ハ古語のりあ〻たれる
の代其代もも 岩穴の居もりるる
伊都之尾羽張神逆よ天安河之水と
塞上て石代塞代天石窟に住しのあ
いはりりる舊事紀 古事等の紀よ
人代よ及ひても

賦有るを以て穴小房くぼのと土物味とは
いふべしと摂津出風土記にみえたりされ
ど巖盤の類イハホといふのみにて
即今家といひてイヘといふのみなれば
古語かはまた家ともいひてイハともイハ
ロなともいひたるなり必屋といひてイ
ホともイホリともいふのみにも即是イホ共
ホロなどいふべし古岩の情しるイホといひ
イハホロといふべし岩穴と鑿開すなの第
なり古語かホリすれなどいひしかホ開といふ

語さはなる日本紀かも開の字と書て
とはいふべし窟の字イハヤと読む義も
則石室なるべし
イシ不詳舊説に石はイシといふて
イシを奈語の河内にてシとは石をいふ
ごとしかはかるべし必可所也加加
シといふことはいつく所ふるかるいふ
水の所まるへさ
ふたるこそ
磯といふのことなり其語の情もまた其実
いふ実也とも今按石の字イハとも読ミイ

石

ソこもよみ天石屋戸石上振の社のことゝ
さゝ〳〵即是ニイハとはイは四説のごとく
いゝ〳〵も同也磯同廂同なり又古語よりしてはイハ
ハ其根の盤もとゝいふこれニイハとゝいふ
也日本紀よりの字と誤てシとゝりふイシとゝりふ
根の下に行の字よりて下津石根ゝふこと
就言へハ其盤根大きなるをイハとゝいふ
イシとゝりふなり

又細石とサヾレこもすゝレイシともいいて
礫の字と用るはすゝとは細也小也すゝ
いゝとゝいハ小ゝとゝてゝ小ゝとゝなるの義ニレとゝい
ふ也語脚ニシとゝ即石ニ又高葉集歌
よ古のゝふるゝとりゝこいゝ〳〵とゝよ唐

の方言也とゝみとゝ仁德天皇の御歌よ
イクリこいふ支のゝとゝ萩よハリハ石ゝ
いふ也ニイとは肥語なり〳〵みとゝは此語
同事なり〳〵今も俗よ細石とゝりゝ
土堤とゝッチクレとゝい也も土の石よゝ
といふなりゝクリとゝふを略ニイシとゝ
沈スナゴ太古の語よはスとゝもこいゝ〳〵とゝ
みとゝなり沈土根とゝも神かゝりまた
例とスとゝいふもの又是によりてイサコとゝ
いふ也石ふりていゝ〳〵とゝなるとゝ

細小砂石

ゑふ歳とイシナトリともイシナゴまくいこナコこも
トリなどゝふのゝゝふこれなり
こサコこもいぬ古の俗化ねと夢やゝ河
こゝいゑこナコゝいひゝ支多ゝ万葉集
ご堀ゝいふくうつくゝれとゝふこゝいゝナゴサコな
真の字読てこゝもこナこもりふ
ゝゝふは真泥の滑のるゝといひゝとしたゝ

已上土名

山

ヤこの義不詳万葉集抄ま昔し山とい
ゑて子ゝいひゝこゝやこゝいふをやゝ言ゝ
るゝこは色なる沢いふゑ真形の言ゝ家なる
いぬゑゝいゝてされゝ古語ふ八俣ゝいゑ

八田間なゝいゑゝ例ようゝやこゝはたゝ
真言ゝ南つゝるゝといふに似ゝる古語ふ
やゝいゑゝにゝるゝ稜といゑゝいひゝ
ようゝ張ゝ南つゝるゝといひゝ河ゝ九ねるゝ
稜をなゝいゝ真形自ら言ゝ張ゝ帰つゝ
もゝ真ゝ桃力自ら間河ゝさゝゝ漢字
と得て原の字と漢てやゝといひ間の字漢
てこゝいゑヒこるゝいひゝ地たるゝいひゝ
屋とやゝいゝこゝゝ言ゝ美ゑ玉とメこゝゝ
形るゝ河原ゝゝされゝ山のこゝゝを真
ゝゝ如ゝゝ仁奈ゝ言ゝ古語よイやゝいひ

今も俗ハイヤヤマと云ふ山の字と云ふてヤマハイヤヤマ
はおて其字に用ひてこのごとく書とふ筆
ハの字漢てヤマとよむ筆に永字也大古の時よりヤマ
れは古漢の筆と失ひ毛筆の象ありて
先きの云ふる漢字に執まへこと有
といひ毛筆の起りなれ
て人ハ其筆用ひ
ふもなふへ明らかなれハ多くなれ
山の字漢てムレといふ古俗
の方言ムレとよむ
子といふ上古ハ子といふ万葉
集抄ハ昔ハ子といふ

筑紫根富士根
なとの表之
古語ハ子といふ
筆者ハ峰と子といふ
おとく動のさるの筆なるへ又ハ神
ふたつといふ三字といふ筆たるへ
後世の俗三つの山伊豆の山
おとくなとハ千やといふ
三千なるへ
用て漢て三千
高山之可渝而過者山頽也姉首
之有頽項也と此筆者品字ハ流ハ

まゝハ家山し俗よ言ふ山ハ瑜く上り
下川へふ紙タウケといひて峠の字創
造て其字紙ちゝを郡山頭也タウ
ケとハタハ高ゝ魏集ウケハ穿ゝ高
山と穿ちをぬるハタウリゝい姉
古事紀よ神倭伊波礼毗古命吉野山よ
ゝ踏穿越て宇陀よ幸ます云ふ事紀ま
も有り日本紀よ穿渡てウカチ穿乃の義ゝ山嶽タケといふ
タケ日高ゝ倭名鈔よハ漢語抄川て
山嶽の字ミタケと讀ひ注きゝ云ふ筆ミ子

の筆小同ゝ藁事紀日本紀ハ共小筆
乃字紀月ひてタケと讀ゝ山頭の字
いたゝきゝふ人の頂よかゝるゝ所
也呼日本紀よサキと讀ミ私紀よハ山
側ゝ面山ゝ注ス倭名抄よハ讀て
ミサキゝい姉ミとゝいふまゝミ子を
タケのミち筆に同ゝ峠の字の下紙併
ゝ山の地名
たゝなロゝ和りゝふ所ゝこにあるゝ立吉よ
ひゝ所ゝこしの人よむゝふよ山の
異ゝとゝ所ゝ奥ゝ秋ゝとゝ所ゝに清奥ゝ清水ゝ
武限のゝゝゝゝて山のさゝゝたゝ所のゝとゝて
をゝゝゝゝゝカゝゝゝゝゝ今の俗よ化あの

さしもたるさいふ事なり　鼻といひまたは鼻と鳴
ものこうしあり　ふる岬漬てサキ〳〵ふ

峽やこノカヒ〳〵ふ〳〵山の間也カヒ〳〵
いゑアヒ〳〵ふ　伊語　五葉集の詩にハカヒとよめる歌の詞ふ
ひしくりふ　岫　クキといひ　洞ホラといふ倭
名抄ハ　みたり日本紀ハ洞の字
漬てクキ〳〵いふ　倭　上言の初る
クキ〳〵いひ漏し　古事記ハ陽神火
神と朝ノ〳〵　ル力ヒ手上ハ集る血
子俣ふ〳〵漏む　いふ事紀ハ漏て漏漬

て久岐〳〵いふ　倭　又舊事紀ハ廿炭
名命父の神の指ふ〳〵漏漬〳〵　ミ
えと古事紀ハ手俣ふ久岐軒〳〵
ふ〳〵ことハ見也さ小落ふ　漏む
ふ不ともリキ〳〵いふ間　乃漬てリケヂ〳〵
い姉ノこと〳〵ふ見　洞　前ハみ紀穿漬てウクチ〳〵
ふ帯　洞　ふ帯　洞　ふ　ウクチ〳〵いひ
沿ハ　岬　も洞も山穴ハ　ハ　ハ
い姉ハ　洞　洞ハ　ホラ〳〵いひ　洞ハ
日本紀ハ間の字漬てホル〳〵いふホル〳〵
いひホラ〳〵いふ　ハ　伊語　坂サカといふ

日本紀ニハ山陜の字ヲ訓テヤマサカト
いふ云〻ハサカトハ陜也
麓ヲモト古語ニハヤマトいふ日本紀注
ニ麓訓テハヤマトいふ是也ハトハ端ヲ
同説ニヤマトハ山の戸ままといふ事
こいつて是山ハ入口の端くにいふ事ヤマトハ
ふるハ山のまわりをいふ事ハ倭名鈔ニハ麓訓テフモト
こい故モトとハ踏初事ニ山ハれる初の
事也初めの字ハ古刻モトといふか初の事ヲ
ヲカ義不詳

丘

谷

タニ義不祥上古ハ丘ヲ〻いふて
谷に対ヲ〻ハ八岐大蛇墓延千八丘ヲ
八谷之間ニ味耜高彦根神映于二丘二谷
之間ニいひ〻ハこれ也ヲカ〻いひ
タニ〻いふハ起〻ハ緩〻いふの謂ヨリ山起
立ち山傍絶ハ事ヲ〻ヲキ〻ヲカ〻
いひタニ〻いふ情居ハ情居タニ
丘訓テヲ〻いひ〻ハ
尾の字ヲ假ルトテヲ訓テ舊事紀ハ
ハ丘ハ谷の字ヲ古事紀ハ八谷八尾〻
ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ〻ハ

陵　其後丘陵岡丘等の字漢文に並ぶヲカいふ文字にて峰巒の字漢文ヲ
いふ文字なり日本紀万葉等の又谷の字
漢文ヤツといひやといせといひウナ
こいふこと也ハ方言の同じきなるべし
なり漢文ハザマこいふなり山爽水回
澗なり谷に同じ谷漢文ヤツ
いふ事ハ橋戸也凡土地よりみたるれハ其地山陽の
方言ヤツやもやとやつとぶに同じ
こうてやの津ホツの有と納なるべしとは
ハ大和国泊瀬川也谷と書田就よハセと読
泊瀬也といふウナトリふ信濃国更級郡ハ小谷
泊瀬川ウナトリふ田蛙の名俗ウナ

ウ子とハ山蛙の名俗ウナとハ
ハナこいふ日本紀ハ薬我入鹿家と谷の宮門と
いふこと也漢文ハ谷漢文ハサこいふ地名多し
もの也信濃国東山
其姫東山の方言ハサこいふ地名多し
の方言ハにおこるにやたいつれも當ル
鄭　倭名類聚抄　谷に同じ本雅水出山
入川日鄭の説と同じ
よ谷川といふ
原
ハラハラハ開也　古語ハウシ
ハラハラと開く事
日本紀ハ開の字漢文ハウシとハいひ
遠遠とハルカこいふも開け遠ハの意ハ今も

筑紫の方言より原とはいふこと古に文
字にてアラといひしなりアラとはハラの時語
ふりて即曠野也又古語より天之原海原
河原なといふ類をハラとはヒロ日本紀
小川上の字をカハラと訓ることもあり
まるはの原橋原はるといひしも類をハラ
と訓ム林を日本紀より竹林の字をタカハラ
と訓て林原とはいひ難
あれども
野
ノ義不詳 古語のノといひしは伸るの
義なるべし 古語拾遺より集の字を萩して
ノと伸すの義をいふ例多くノミといひしも
ノヒともいふのことなり
ミスフヒなるノ云々皆これ時語也 古時
野の字訓て十といふ例多くノといい
ふなりいふ時語也又古語より
無を莫と其義
なるべし
変ハ其原遠曠潤の義なるべしにて
凡屈なるものを伸しなれば曲変なる
ものと熟して年小なるすべもノスくふ其義
並なるべしなり

杜

モリ　日本紀ニハ柄杜　私記ニ云ヘリ
モリトヨム　天武紀　世人ハ字ヲ誤テモリトヨム
事是ニヨリテ云ヘリ　ハ杜ノ字ノ
ヲ社ノ字トシテ誤写シテモリヲ誤シ
同書紀ニハ湯津楓木　古事記ニハ湯
津香木ト云フ　日本紀ニハ湯津杜木ト
シテ　ヒフツ　ヒ　ヒ　私記ニハ
杜字ヲ桂字ト誤リ　ヒ　ヒ　柄杜ノ
ヲ元ト　初ヨリ杜字ヲ作タルハ私
記ニ云ヘリ　コレモ其誤ト云ヘリ　多クニ

タリの説もうけ侯て云ヘリ　ヒ　ヒ
必可コレ後人ノ寫シ誤リテ私記ノ所
ヲ　ヒ　ヒ　社ノ字ヲ変ウフヘシ
万葉集ニハ社　社ノ字其誤テモリ
ヒ　ヒ　古ノ樹ハ　ヒ　社ハ
樹ヒ　ヒ　其ヲ　ヒ　ヒ　モリ
ヒ　ヒ　日本紀ニ石上
根ノ神　ヒ　ヒ　生玉魂社　ヒ
ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　私
記ニ其也ヒ　ヒ　ヒ

也又社事にしたがひて神社ふしもの〻はゝ
孔木多〻志ゆきかはゆもりのかいしゝと
度人遊よ木多宛こい姫義も切れも
表の字借用云もりとすむ事にもなる
なりかゝるなりいつもの代よりも多りる事
こたの諸よ神社ともりこもイツキこもい
云〻其義の必さい既よ廟ぬ〻らしかと素
鳥神刹羅の菅尸茂利梨の条にやうう
なしゝとみん又神離の字濱てヒモロキ
といふ其モロとしもりこいふ並よ是古よ

神社共祀りるそのごとくいしゝ不よて又
度小ハヤシあゝいしよ因〻武事とそこし
たれモリ〻いふもの事い佐名祢よこ日其字
日本紀よらし不よてけの人ぬ〻可しも
事〻ぬ〻と
うに消〻ぬ

林

ハヤシ義不詳出雲國風土記よ玄宇郡
郷志郷の事と記〻て昔國造〻〻大神
大穴持命越の八口と事きむたあよい地樹
林茂盛と不よ〻まして吾所心こ波乗志〻
のたまし〻ふ林〻いふ神龜三年の記に
依りとて志〻もの事こたく是に上古

の時と考へるせしにハヤシ〳〵いふ説乃台ホギ室寿の
間〳〵始め又顕宗天皇記よみし刻よ葉ゝ乃ゝ者世家長邪乃ゝ顕也取
奉棟梁者世家長邪乃ゝ林也〳〵ふ事
みたり日本紀古事紀日本紀等の書
小上世の事共ゝ考へるせ〳〵ゝこゝろよみし〳〵林の
字皆漢てハうといふ原のほふ漢てハヤシといふ
変ハ世天皇紀と始ゝ寸其後ゝ皇極天皇
紀よ禊我入本鹿島ゝ林臣〳〵ふゝみし
〳〵も林漢てハヤシといふ万葉集の詞に

綜麻形し林始〳〵みし〳〵と初よハ杣山ゝ
このゝ山〳〵に木とし〳〵初ゝ〳〵みし〳〵
今も俗よ礼初と生し〳〵る礼ハヤスゝ〳〵ふ
是也されハ林とハヤシトいふも其初
神社と字〳〵ゝ〳〵ふ所ゝ〳〵ゝ
世いし〳〵と生し〳〵世ゝ樹と生し〳〵ゝ
類生し〳〵立て始ゝ礼竹樹乃
事にゝ〳〵ゝ〳〵ゝ礼ハヤシといふ
素戔嗚尊の時八岐大蛇のすゝ〳〵地八口を定礼ゝ礼
ゝに大京郡よ八口神社ゝ〳〵凡土礼よ下矢明神
社〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

の名いらふ神川部のこゝなる遺物けしき
志郡の外浦ゆ沖のめよハヤミとふ其多うう
弐よ志ゆ志ゆもゆ意ゆこゝゆ師ゆとも志ゆて林字用
ゆ甲斐国ゆよりたて又の
ゆふハヤシゆゆふ地ゆうの而と林沖社波夜志神社
郡志神社ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
社ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ハヤミゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
有前の裏木ゆ地とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
てヲカこハヤミゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆ彼ゆの沖ハ部ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
以多記皮剣子ゆ徴ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
義又不詳四事紀古語拾遺等に平
置帆負神彦狭知神とゆて大峡少峡
之枝と成て瑞殿と造ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

仙覺抄ハ只ヤフとハかつらとのつゝまるやうのものゝ名なるゆゑに因倉のもの
ハやハうともいふなり皇極天皇紀民
間の諺ニ ミヤこのヤフハうとよるべ新ハ
ミヤこハ嶋也やフハうハ義系ゝ人たり
さゝハやハうといふハ即數系ゝ語同事
のゝきゝ今も俗ニやハうともヤナとも
いふ邪見ゝ又傳名抄ニ越中國大荊
の郷と讀てヲホヤフゝいふゝ人たりさ
らハ又荊棘義生の比ともヤフゝ比國ハ

今も俗ニ竹叢と呼ひてメカヤブなゝいひ
て叢の字借用す其拠るとこもいふへし
澤
サハ義不詳 私記ニ多の字讀てサハとし
古へ有謂所多為左波とみえたり 澤
呼ひてサハゝいひハ其革木魚鼈亢多
なるの類ニよりてかくいひも生多へし
牧
マキ マキとハ牛馬心キハ置ゝ馬 沈
叢亀ゝの類ゝ傳名抄ニハ牧の字ムマ
キと讀りし

已上 山澤

田

タ義不詳　古語ふるとタといふを漢
てタヒラ〳〵といふもよにすていひ〳〵云へ
今も常陸とテノ田とタといふも其平らなる
事一のよのこゝろなるをかくいひ〳〵なるべし
又古語よ田地とシロといふ日本紀よ田地の
字漢てシロといひ〳〵即此後の俗まる
代の字代なるべし田地の字のごとく
又田と畠の事にも代ともて日本紀よ
頃の字漢てシロ〳〵亦此之あるその
シロといふ義のごとに已に顯をは詳なる事別よ記

地のいひをす　町ごとにふんこ〳〵八間之千ゝ
も乃ち田間ゝ乃を町といふ之字中市上の巻
陌のごとくに町ゝといひも又間乃の第也
陌町采如町又ハ市人けゝ〳〵数之傍名歟庶
陌の都采如町又ハ坊の字漢てこチゝといふ
田十反と一町といひ〳〵のごとくに代ける字の
田區といふようて區の字漢てこチゝく
いふも又代第にようて之畷十八丁傍名歟
已多字花と川て田間乃之漢語歟漢て
十八テゝといふゝたゝ十八テゝといふ義不詳
俗間よは縄よあるゝ之地と異ふもの

田と字のにも縄川と寸変ハ上古ようの
俗ニテとハ方業集抄よウナテといふ
事とウナハ海ニテ月ハ多分筆ニ通ニ
いにしへさくハナハテと月田の畔に縄川と
すかうの乃ありていひ〳〵畔ノ名倭名
鈔ハ田畔ニクロといひ一川よアセとふ
みたれと上古にハアゼといひ〳〵素戔烏神
日神の御田の畔と毀ハ〳〵田事紀ハ
と古事紀ハ嘗田の河と離川と書乃古
語拾遺ハも毀畔淡てアハナテとふ

式ハ方言の同〳〵ぬよりたる今の云
の異なるやうなる其筆も亦詳なる寸或人の云
野し云事と云へる事保かなるハ古今伝今乃こ
とくにこそ云へれ況や太古撲陋の併ハ
語言のまふ異筆と四のくに求むへく寸畔とアといひ
ましたる古語よりとメ〳〵いひ是とアゼ〳〵
なるされる田と畔とハ相須し筆なるて其界とアといひ
畔ハ川原のやうに明なるとうて其界アソ〳〵アセとふ
ひもとふ〳〵ふ又名〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ

いふことなく其田間に交絡する畝ウネこいふ
義も不詳 古語拾遺に粟田とまうすといひて
いにしへおほくはたつくりといひウといふ其沿
の情なるべし 祝詞に粟田とあつはつと傍に豆
田とこメつくりとあり 粟集に麻のはふ
ウとよむ 畠とウとよむ 畠とウとよむ 畠の字
みたくさうふたのけふ 粟豆麻等し田つく
もウこもいなるべし 畝とウネといふことも
ウとよむも田に子といひしは垣根なるべいふ
ものことにして又三百六十歩を一畝とうるべの

字 傍てセといふことなれは其義不詳 倭
名鈔に畎傍てタミソといひ 田中渠に
注したり 四事紀日本紀等に素戔嗚神
日神の御田の渠塡ら埋といふ事と廣
渠理論の字とあるされは字川合せてミヲウ
メと傍むべミソこは水の情沿に度に河渠
なるいふことは相とつへきなるメミソこは
云なるべし又論の字日本紀に傍てウナヲ
こいふ其義不詳 ウナは縄なるべしウナ
けるべし 畝は畝の義なるべしの義なるやい

曠

ハタケノ義不詳日本紀ニ曠ノ字ヲ訓テハタケ
トイヒ新撰字鏡ニ畑ヲ之田ト注セリ倭名抄ニ
モ日本紀師説ヲ引テハタケニ清ミ別リ
畠ノ字トモシテ後搜神記ノ江南畠種
豆ヲトイフ文ヲ引テ畠一曰陸田ハタケト読
シテ注シタリ陸田ハ水田ニ別リテ畠ノ字訓
故ニ書紀ノ訓ハタケ是古ノ俗字ナリ
ハタケトイヒハタケトトヒケルヨリ訓ヲ畑ト
ヨフユヘニケリ又倭名鈔ニ火田
ノ字トモシテ漢語抄ニ引テヤイハタケト読
ミ又畑ノ字ヲモヤイハタケト読テ唐韻ノ

火田ヲ不耕而火種ヲトイフ説ヲ引リ
ヤイハタケトイフハ火種ノ田ノ義ヲヤイトヒ
焼ハタケトヒ焼田ニ古ノ対ヨ田ヲ作ル事
ヲハルヒトイヒ又ハルヒ開ノ義ニ
延喜式ニ信濃ノ国更級郡ニ焼田神社ヲ
焼テハタケトイヒシ又也ノ国栗本郡ニ焼田郷ヲ作ル倭
名鈔ニ焼テハタケトイフ又田史ニ小治田小墾田ノ字
共ニ焼テハタケトイヒ畠ノ字焼テアラキ元ヒ
地ヲスクヒヒラケル
又俗ニ烟ノ字ヲ用テハタケ
焼シ此字ニテ畠ノ俗火田
ノ字ニシテ創造ル所多シ
園
ソノ義不詳苑囿等ノ字焼シテ亦同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のこゝ〳〵ナミ〳〵ハ嵐〳〵ハ海〳〵ハ洪のゝ如〳〵いふ
ナタ〳〵ハ〳〵ハ巨浪ハ情なる
辰ハ〳〵こゝ又たる

氷

ヒヒハヒイヒ　同事紀日本紀等ニ元
出雲國飯の河　古事紀ハ肥川ニ流るを
紀ハ出雲風土記ハ斐伊川ニ流るすなこ
ちゝ是也ヒイヒハ冷也ヒヒイヒ
ひヒエといふハ皆情語ニ万葉集歌
ハ氷ヒヒヒヒエといふも氷ニ対するいふ
即此ニまゝコホリ〳〵ハ嶮也

泉

イツミ　出水ニ　飛泉ヒタキといふハ

タキツヒ　タキ〳〵ハ滝のこと
ハ〳〵ハ〳〵ハ〳〵

速川の瀬なるいふ事もいつふメキッ
い姫い郎激の謂なて沸泉の事に古よ
湯の字清てタキこやいい飛湯の義になる
なり後よ湯の字ゆい清てせいい瀧の字
清てタキいふ倭名鈔よ唐韻南人
名湯曰瀧の説と同たく温泉清てユ
いふい其泉の湯なて湯のなるなるなる
なり日本紀の注の一書よ泉の字清てヨ
モツいふを郎是黄泉に黄泉い地
下とさしていふヨモツいしいやミヂ

どい姫の情こやミチいふを冥途なり
式扶よ上古の俗ヨモツいしい郎梵語
の尉麼こあとものり是又天とソラ
い姫く郎供羅こいふものを
沼
又又い義不詳　古語よ又ぬまいい
しこ万葉集抄よ又ぬまのかれぬ
といふこいふさしく古事紀よ天沼矛
こ実毗古の神矢串と貢ぎいい其神
手の矢と後いいいいいなる其湖と無沼海
こいふこみ今の和泉国の南海道に

古ふ又くいしくものて後ふいふくこゝ
同しくくぬを倭名抄ハ隣の字を書て又
こくもいしくを倭ハ又こくいしくものい
水にまくりぬる所の流れ沙のたまり堀まくて
其あ流きとくいくくみもたくもを倭ハ
くくくの所とも流くいいくを倭ハ流れ岸の池とかい
間ミくいふくて流れの水抜ぬて其名

池

イケ義不詳倭名抄ハ玉篇ト云て
畜水也と注セくれたく築イケスくいふく
同倭名抄ハ康韻ト云て池水中編竹

籬養魚也と注セ承俗竹ト編もの
のと簀をいふ池の竹籬なく
イケスとハいふく

塘

ツヽミ倭名抄ハ纂要ト云て築土過
水曰塘又謂之隄ト云ふ又禮記ト云
て畜水曰陂隄亦作堤共ツヽミいふ
ト云たく
説文ニ曰ツヽミハ言累土土ト積
ル土堤の字ふ築土畜水之策ト今俗ハ堤ドトいふ
ハ唐韻ト云て堰埭ハ以土過水ふく

但シ井ト只止*ノミ集ヲセキトハ塞ヘ
水ヲ止サセ集ヲウテ塞クノ謂ヘ

井

井ハ万葉集歌ニ井トハ山つまるこいふ初ヘ
こいふ地ヲ鑿てあと集ふしるの義歟ヘ
日本紀ニ好井の字濱てシミツトいふシミ
こハ久シ也シミトいふ久ふハ情語ットハ
是モ万葉集歌ニ井トツトいふットハ水ヘ
といふこれ井ハ清ルヲ好とする事
なれ好井の字ハ借用ふ字ハ後ニ
清ルの字濱てシミツトいふ又ハ義ヘ

河

川ハ水ノ義不詳川の字濱ムこ又同ヘ川
亦濱てカレトいふ百濟の方言ヘ家ヲ
の濱ふ川流トナカレこいふも彼國の方
言ニよるなるヘ（即今も朝鮮の方言ニ川ヲ呼てカレこいふ）
川の名ふナカラふ所ふ所て長柄の
家ヲ目ヲ当ル歌是ナカレ川の義ヘ
古語ニフフいふハ你の義ヘ又ハ你の字ヲ濱て
フカトモフケトモいふこれハ你のカケトいふハ皆語ヘ
其義まくニ同ヘ
河濱てフチこいふハ你水の義
なるふ所ヘフこハ深ヘットハ水ヘフッ又

博してフチといふ土とついてツいこもッチ
こもい物のこと　倭名抄に説文と引て瀕
を濱くしてせゞらぬ波たつといふこゝもみ
えたりうゝハせといふ塞の字にて水の
砌石のたゝふ塞うれてとうれのうゝさしハ
一説ここもいい出ハ八十波なもも
いゝ　也古語ふせといふ塞し字ゆゝるれい塞の
字よりてせきこもせケごもいふゝ其キクな
とゝいふのこゝ　ハ　みる説日こ　渕の字漢てせといふ其
字の書にあるもの　倭名抄に唐韻と引て渕低渕
ま〻倭名抄に文選江賦と引て瀕を漢て

ヨトミといふ俗に淀の字と用ひてヨトミいふ
瀕〻淀〻古字通す　如渕所流ふ〻
淀〻たり淀の字元〻西域傳其水停居
といふ亭の字〻音同〻いふすゆ　所住古会
〻いふ水止曰亭といふもの〻今も俗にヨトム
ものゝいふもの　万葉
集歌にもヨトこ　ハ源〻て浪なもたゝ
すのゝ物のゝ物ゝ而といふゝこゝたゝ
江　工義不詳　所出て工といふものい
何ふもの道流のもの　其水源〻入るゝ而と

いはゆる入江湖といふ即此に漢字江こいふ
元のかハ同じ〳〵なれ天智紀に高麗の客を難波の江に饗す
にしかるに方言なるもしかれども江と工とハ事も彼
ミツウミ水海と言時湖水とハアフミノ
ミなといふ万葉集歌よりアハウミとハ
ミホウミに同じ〳〵ぶる水海なるといふとみえ
〳〵ふるなり海とハ〳〵ハ其水大なるして
海のごとく形なる所に通江なるとチカツアフミ
こいい遠江とトラツアフミこいかい
見こ其を遠とよいとハ京畿と相対す

の近江といふ所に遠江なるの湖ハ後土御門の明應
流決して水涸れ其水使きれ八年九月又此満水のたゆ小湖の下
八月の事なり一説ハ後桃園院安永七年
ミナトともいふ又たよい湖の字漢て
淡て中の海なるつといふ是なり
海
ウミ太古の時よアマといい〳〵ハ即海こ
天こと呼てアメこいい〳〵と其語情
てアマこともいへ其代よアマといい〳〵語
天と海と相混ずることも多し古語ハ
いい〳〵天と海とハたゝハ亦に天皇
の五代の末に〳〵とりふ彦瓊瓊杵の子〳〵とりふ彦火火出見の子〳〵とりふ彦波瀲武鸕鷀草葺不合

紀小ハ天し日并こみえ日本紀ハ天日扶と
姓氏録ハ天日拝とみえて其ちがひ而名吳こと
いへども天の字漢てアマとよむハ皆同し古語北越
にハ俗梅換こ云ハ梅ハ古に同説と
録して美ちがひ録ハ古ハ家ものの古事とよむ人の多と
すべき事のこと乃ち紀ハ家ものの古事とよむ人の多と
暦しへこと ヤ 姫 ことなし 情してアつ
いに又ワタなるといふ紀ハ古の方言同
じくなるにより倭ウミこと云ふ大水こ言
語ハ大とウとなること云ふ高市紀日本紀
名ハ大人の字漢てウシとよむ万葉集
に大海の字をウカとよむ也ハ如ハ昂 紀こ
ワタの義ハ不詳海とこそ云ふハ韓地乃方言
日本紀ハ海と
ホタイとよむハ百濟の方語ハ今も朝鮮の俗ハタ
ヒとよむ是ワタの訛語と秦 畑とハタ
いふも此義こ為ると海換 按
ワタとウミとの二語とハ
こハ詞助也ワタハウミと海上こ云ふ
ウミヲキツウミなるこ云ハ大海こ日本
紀ハ溟渤の字漢てヲキウミと
倭名抄ハ漢てヲホキウミと云ふ
日本紀歌ハ漢津の字漢てヲキツと云ふ
さうハヲキツウミこ云ハ瀛海こ其ツこ云
ふ是もまた語助こ潮とハ古語ハ海ホ

いにしへと俗名おほい潮の字をあてウシホといふ
云々シホとよむ義不詳ウシホといふは
海潮也古事紀には海塩とあるたるを
食塩也もシホといへども其名とするに
あらず朝と潮といふ夕と汐といふとみえ
たれをアサシホといふを潮ようてエウシホと
いひ汐よりてこうりうをもし或説は潮とシホ
いふ並はこれシムといふ説の誤りなりて其卑の
ハ白ことといふこれとシモといふ潮とシホといふの
ことに其名にようりてこれたれ海濱の鹹土を潮
始て其名のおこりの白ものを潮と変して後は
シモといふ

別

シマ古語はシマとよむハスミの特説
也水中可居の所をスミといふ其説
情してシマといふ八例知之といふ事を
八隅知之ともいふ是之一方葉集歌は新
セ〳〵潮の名シマ四事紀は例字をあてシマ
とよむ〳〵と古事紀は爲の字にあてる
ろ〳〵事い太古の時は洲とよむて又
いにしへ又ヒチの神と洲土根とあるされ
しのぶけ業に後は洲例の業にようて例

の字ハ其字の音のまゝに又ゝ讀こと國
の古言ハスゝ　シ　ゝふハ禹の字と同じ
どいまゝ又ナコのゝ讀ゝの流ハ日本紀ハ
滿の字亦讀て　シ　ゝ　ゝ　ふまる日本
紀ハ島傳て　アサキゝ　ゝ　ゝ　古俗の方
言ハ又彼ハ　ゝ　ゝて禹と呼ていてセ　ゝ　ゝ
ゝハ即是今も相撲の俗為とゝいて
セムといふも古の半人言ハ古の吋偏の字讀て
滿の字の音ハ　ゝ　ゝてセ　ゝ　ゝ　ゝ

水涯の少き所を点といひ岸とキシといひ小細石と
ハ点といひ偏とナキサといひ荒磯をいふ
ふ云しものこと〳〵石岸の崎〳〵
〳〵すた花よりハとハ
し並これ物語すてかめり

濱

ハ二百葉集抄よハ二ハ又ハ白き
おとゝしこと云ハまゝ物の初こゝみたり
さしいハこゝとハ蘇漢てハヤこゝいひ
ゝくに其海の端の面を物ハアこゝハい
いしあり〳〵古語よりこゝハ海〳〵ハアこゝ
いふ吉の約四章紀日本紀等ふい汀の字と
漢てハこゝいひ又邪磯の字をこゝミサキと

いゝ〳〵と古事記ハ濱の字漢てハこゝ
いゝミサキハ邪前の字と用ひ〳〵倭
名鈔濱の字ハ訓ハ古事紀ハ
て河の字と唐韻の水涯平洪こゝふ
説と引て漢てミサキこゝふ其後ハまゝ汀の
字とハミキハこゝ磯の字漢ひ前に
みゝ岬の字とよむこゝ岬ハ山側といふ
こみこゝ碎ハ水際といふ〳〵汀漢て
ミキハこゝふ唐韻水際の義によるゝ
〳〵曙第ま〳〵法令の刹
〳〵ひ〳〵又海濱の北潮

所々の洲國とカリこもいしヒカリこもいしシホ
ヒカタなどもいふを四説の方し案べといふ也
鞭塩　さゝハ潮間し方といふ義もそなへ
ふ侍る歟ゆは師説として海の字濱
てカタといふなり

浦

ウラ義不詳傍名鈔ゆは四義字義記
引て浦大川、雳曲渚船隠風所也とこゝろ
古語ウラとウラ浦とをいてウラ
いつれの義ゆうへウラなるといふ
もし表裏ヌヲモテウラこもいしに也にはし又
所葉集ゆはウラとは下こウラモナシるとこゝろこ
もしこれこウラどりいウラムといウラトモヒといふ
の類皆皆公のうちにはりふゆとい〳〵ウラこハ下也こゝふ

もし又裏といふ義にとるまた又古トいウラこいふウラナ
ヒトいふヒとのこゝにはウラアハスゆとはしくくして
壠甲のうゝの方と海のカノ尖ゆてやさて表の方乃
寸又土ゆもウラ〳〵ソふウラウラシこもいしまゝウレ
こもいふはこウレ〳〵いふはウラ〳〵ふ海の内もし
まゝ未ともウラ〳〵いふ事ゆウラワカこもいひ木ゆウラ
カレ〳〵いふかこそこれ又爰にハ梁樹とウラクハソ
キ〳〵いひ〳〵こみこたゝまゝ藻〳〵こいふまゝとウラクハシ
〳〵いまゝ和らけゆ事とウラをいふ春の日乃形
もうらいとウラいゆ〳〵いふうこゝふこれ四説ゆすへて童
年ゆふこゝふをかこのこゝくゝの末いとゆふたゝふ
ハウラどりふへこいひ〳〵ハウラ〳〵ふ
どもキウラフ〳〵いふがこゝふこれこゝとりいひ〳〵ハウラ
ゆこ〳〵もウラウラ海ゆウラ〳〵ハウラ
ゆこ〳〵こ〳〵ハウラ〳〵ふ
いひつへこゝゆ〳〵

已上河海

ひとゝ〳〵ゆ乃ウラ〳〵ゆ乃ウラ〳〵ゆ乃ウラ〳〵ゆ
ハ侍る若鈔ゆ船憶風
ゆ〳〵て凡辰の平ゆ乃形ゆ

東雅巻之三

地輿第三

従五位下源君羨撰

東　ヒンカシ

西　ニシ

南　ミナミ

北　キタ　太古之時東西南北の方位をさしいはむし
華夷不分明なりしかとも天孫降臨の後千穂之
久しき布流の峯に天降りまして宮柱を求わたしし時
高田堂狭しと侍りしかは日の巡りを劇しくして
の無き所にとのたまひしかとも方位を

ものいひて行ひし事のしるなもとゝ海さしく
東西なといふ事も又神武の時付て支を志ま
はしに初りて始て東西の字をつかはされし事
なる国史撰述の時ふるまて志ま所はもしかる事
ハ自付ものいふいひひろめ志ま寸又日本紀ハ
成務紀ニハ東西為日縦南北為日横陽曰影面
山陰曰背面と又ハ東西南北
ふ事のなくとて日縦日横なといふなる事
もしかや又東西南北の名既ふ定
まりふ付ふ初りて又日縦日横なれ名付

はしめ志しふや　是又是志ま所はもし不詳
なるを　日本紀なる日縦横ヲヒタシと訓しなれと
万葉集の字ハ日横又是
といふへし日横又是
有ふへきなり
さて八東西南北の名れとき付い付ものはに
はさまりあるやとも加へるを東西はつまと
ふことのなき日本紀ふ其事のゆを志ま所され
はんなるいふしてハ其言葉の吾嬬し
美やとなる志ま所へき東西南北の名のなふ
東西アツマとといふふ必寸其為なるはへられ
といむも侍ふ志ま所しも侍ふされハ人のいふと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又須てクヽリトいひしかたる紀水分神の注ゆ分の字須
てり下りとふと志ろせしうこしきもし延さ比ゆ
祇の分の字須てこゝりとふ多りてりの物也キヤト
いひクヽリトりゆコト紀又志ろ須ゆ志ゆ物し
てクトいひメトりゆこと比物てりトなるくゆ日ゆ
紀ゆ水須分の字ゆこしゆ須てクタガノミチといふくタスカ
といふも物ゆきメとゆ分ゆこしてゆて天ろ須ゆ
わくゆろうスといふハきといふ須の物をしゆ
メといふ須の物をしたの物クヌカといひしゆ
クカといふゆしさくゆ神を志ゆこシカしといひしゆ須
ヒガシといふゆことしクスとつゆもゆ須ゆ物ゆの字ゆ
ゆてサヌキといふゆこしてこシカし物ヒガシといふゆクヌ
カをクカといふも下の人ゆことトいいクといふゆこしゆムゆ
といいヌトりゆ志ゆ物ゆひて物ひ物ゆゆゆゆゆ
なくゆとハゆ須のゆゆゆ須ゆ天ゆ志ゆ物の初紀
の日ゆ知ゆの日ゆ須紀ゆゆゆ須ゆ志ゆ方し
ゆしてきメトいひしゆ須ゆ物ゆて紀年須の地と
りヌカミといふゆこと物ゆてゆりけ草原の中出ひ
ゆ神のこゆゆ須ゆ西の方い当ゆ須ゆ人の
そこし地し地のこ紀の方のゆくゆりて人の

ゆくゆゆ須ゆ紀ゆもてけ出の紀ゆゆゆ須ゆ
ゆ方ゆ須ゆしてヌカ須いひゆ神ゆ紀ゆ須須の二神
大八洲ゆ出ゆゆ須ゆいひゆ神ゆ紀ゆ須須の二神
洲の分ゆ須別ゆ出ゆ紀ゆ須須須ゆ須ゆ墓流ゆ須紀
紀ゆ紀ゆゆゆゆゆ須ゆ今の越ゆ紀日ゆ出ゆ連須ゆ須別ゆ
須ゆゆゆこゆゆの別須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
須いゆゆひゆゆゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
のいひつゆゆ疑ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
國の須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
真ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ

已上方位

國

クニ美石神ゆ須ゆ須ゆハクムともりモシも又クシ
いひそり巻を須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ須ゆ
しゆゆゆゆゆ

淡ハ天地といひしことくハそなきん　別は
　　　

記をしるせり一あるいは
こゝに注せず

郡コホリ四年記に神武天皇即位の初功臣國造縣主等を賞し給ふ記事ありこれ後の代々出雲といひし縣主なるべし郡といふ事のこゝにしるせる成務紀に二年二月出雲立長縣邑ゐてとうんて六年九月簡出河面分出雲臣淤宇宿禰次定邑里ゐて見れば上古人民を招き集めこれを定めたる事なるべし郡縣ともに代々ながらの字なれば是を用ひ撰述の時よりて志ある人々に更撰

縣といひしを後日しかねてこゝに実美なるのにしあらずこれをいはゆる国郡縣邑なるべし志ある人々に更撰国縣邑里ゐて志ある人々に更撰国縣邑里ゐて志ある人々に更撰国縣邑里ゐて

分て縣とするそしといふより後は郡とコホリと
いひしい韓地の言葉より出し也とも郡郷の俗郡
とも縣とも並よコホルといふも郡コホリの略語
こ或説コホリとは小郷といふ意味より
から変あれ共しかたもなき事
村 ムラ ムラとは農民の聚落をいふこ邑
の字漢てムラとよむ又同じ日神天邑君と定
らるしとして又成哲天皇の詔は出邦邑宝
をはじめ邑しるこうしがことき是こ邑
と村こ其字同じうねと其実を異なれ
にあるて景行天皇紀より村の字漢こフレといふ

ムラといふ流の略せしこと又安閑天皇紀
より行村の字漢てタカフといふ牧草生をし
地をヲウといい其生をこ地をナフといふ
しこし後はタカムラといいしは是こ村又
漢てスキといいスウといふこと説也 行乃
方言こ海こ古村人在住を号る村この字
こて漢てスケリといふこと説也亦石海こ方
言こ元姓字ふ村こと称せしは皆是大漢
三韓号の法なるこれ中より漢人のこと
也其祖先三韓の地より流寓し彼ちの村

言ふてふことのなまし永國より海化
せしに歸て姓こうるまし而こと云ふ
星　サト郷の字濱て亦用し郷といい星と
いいさ字おるしねと真濱てサトと云ふ
お返し用ゆる事所うとうしうもうて
和洞の沿よ沿國新郷衣著好字とあし
よ廻式にうさ沿ふ新国郡星衣並用二
字必取嘉衣とうしうことさ並こ郷星
の字ちう濱てサトといふちサは狩やしい
而こさ狩さ狩ふるの沿こ又大化の沿及い

こ後代くの令式ようて遠戸籍く
沿ようしかう郷星とうてうり
郷こ代寛使の用しうあうとうて
凡五狩郷をい樂遷(ラウ)紀寛慶元さ
の沿や又濱紀沿ふ人方ゑこ石ふ為星
こ寛こうり沿ふ沿ふ沿ひてサトいふに
代郷星の字ゑ廻用いわまこと九遠戸
籍度紀字れ法ゑ郷てい星れ字濱用
辺て沿事こ字の言こ用うこうり
道　ミチ義不詳上古ゆこ道こいハチといい

しも道早振といひ伊都こ遊のうとし
いひしまこと又ミチといひしまこと伊門こ
チは昂道こしたる汎は此路の字を用い
てミチとよむ方頗をこまといひ海
路ミサキなどいふことのてし 南北を竹じ
タチシフミチといひ東西を沿こしてヨコミ
ノミチといひ大溪ハラホチといひ小路をコウ
ヂといふ衛衢の字清て チマタとよむい
道のふる訪こる代のふるまを三ナマタ
といひて流すこと沱の字を清てこナマタとよむ

かいとし遊の字を用いて清中ナ字
のこと〳〵るる代永徳の信剣造立ふし
経路清てメヂチといひ同道清てカリレミ
チとよむメヂハ直しと儀は
のふ東西南北の道ハ七ヲにふ多をしる
和宗神天皇の治時大彦命武淳川別命
俗は表丹波造を命ずと化陸東海西
丹波の道こ遣ふ
北陸東海ありいふ神のふくし始こ北陸立海の事
其の方位の條子こ
又ふ史にこしとふるとよむるる こ後京形

天皇の御時天武皇子を東山道十五国都督とさせられしとゝ云ふ事の始こゝ又ゝ孝徳天皇の御代孫を分て邑里を定て東西為日役南北為日横山陽曰影面山陰曰背面と云ふ山陽山陰を云ふの始こゝ又ゝ後孝徳天皇の御代畿内を定て也しとゝ云ふ事の始こゝ天武天皇十四〇九月東海東山陽山陰南海道紫宇佐を使者とさせられしとゝ云ふ事の始こゝ文武

天皇大寶元〇六月九日宰邸司に庚暫一依新令ことを勅せ是を遣使て定る宮告依我令為政うるしに初て遂に我国東海東山北陸山陰南海七道を定し事の作を学

驛

ハミヤ孝徳天皇大化二年正月初置駅馬伝馬及遠路毎郡に使を置よ駅伝を定し始こゝ駅の字漢てハイヽとゝ云ふ依新令庚暫令に駅の字漢てムマヤとよと注しなれと百家

集の歌を長波流宇馬歌と漢字おも
ふハエ〻ハイ〻也昴早雨こハエ〻と
よ指流し又羅流しなどハイ〻ナとよむ
とゝ〻ゆる日本紀ハ歌使の字をも
ハイ〻といひ字ハ流とハイ〻ナ
といひ歌合をハイ〻ムニヤといひ歌るを
ハイ〻といひしらハ歌使をも又ハイ〻とも
ハイ〻ていひしもしいの事法の代よりつまの
方の早馬動るといひしゝとも也しと
ゝ〻ゆる芸言歌を歌並る羅る伊馬流

砥ぐと写の法を合式るふゝくて又水
歌まを歌寄まを杯を玉丁を配きの
條あ〻ま〻歌とを歌とをいひし事
保氏物流ゆ日本紀並万葉
集の寄に玲舟といよゝとゝ万葉
のおまを歌流の杯の事ととゝ〻
を歌使まを玲奨ゆを玲里しかなよ
かゝハいひるし又亨の字日本めよを
ムマヤムチとよみしと傳衣おおハアハラヤ
と漢と　歌衣の寄人不停集しとよ

橋

橋

ハシ　義名抄の初注湯二神天浮
橋のよう立給ひしといふ事えたり　四ノ巻

日本紀に　丹後国風土記ニハ国興淵郡東北
の隅ニ天橋立ト云フ所ノ是ナリトイフ
橋ノ広サ八十丈ト記シ玉ヒ賀古郡石橋ハ
十橋ト云フ所ノモノ是ヤナルトイヘリ　と舊
説ニハ天浮橋ハ丹後ニ有リ所ノ物ニ是
ヒトツトイフ　しかれとも是ハ天孫降臨
時ニ天浮橋ヨリ下リテ筑紫日向ノ高千穂
ノ峯ニ降給ヒシ　ト云フ事ハ　ナシ　しかれとも
ナホ神代ノ事ニ　ナレハ　是ハ　この橋ハ天浮橋ト云
ヘキ事ニ　ナリ

もの、まをしい
ふる川、大こ貴、神宮寺のこれ以ぬを過
り給へ也。此の事の神彼神の名にて
大元日隅宮と遣て也。是を彼寺にて海の為
もまた奥のこれ小三橋渡橋と遣て也
海こ天の安川小も遣れ又天の安川
よりも也。遣て也。しかして此の所
こと記ものこれ橋あをしなりよ
もれ制ものれ橋と也れをれいま
よりとこれの橋のるもれて名れ彼よ

ハシといひしこそなりよ彼のこと
きよ彼とは此の彼ものとこれ事ものと
いひしこ是して墓して彼ものとこれ事ものと
を彼といひるこれてのものとこれ事
こものを彼といいいそこといものもこ
此幣嶽の嶽のてよし号を真もの家よ
へこ助とはこの号これ事もの号をい橋
もまこ彼峯とは此号とこの彼号彼号事
ものこれ彼号彼号事ことは彼行これ人機道を
カケハシといもこ又此家よ夫ものハこれ事

倭名抄ハ猿屋の字後てヤニソカケ
チといへり 矼の字後てイシハシといふ
ハ石橋也 北の字後てツチハシといふ土
橋なり又倭名抄倭の條ハ揚氏漢語抄を
引て意臺ハ橋 毋橋 所謂 ヒ橋 柱を所ウ以柴
花 枝 なりとて人ものハ橋柱の橋ハ漢ハ
濃橋といへり此今俗ハ橋のキホウシと
いふ是こキとハ芝ハやホうしを帽子とし
て形ハ蕈にむ蕈と
津ツ義不詳 ハ波ツまつ

ハの義こハ波ともハ集の字後てツとも
ツムとてとアツムアツムアツムなるべしと
津しハ舟泊の集まるまハツといひしに
ちなみ舟泊ハ舟泊の集まるまハツといひしに
ハしといひしことなるべし 著の字後て
ハしといひしことなるべし 津ハ泊てこまとも
よりまれなり
濱ハ舟泊の此 日本紀の津ハ字ト二リとも
とハ舟泊の此 ハ舟泊の出入るハまるまハ走る
ハ舟泊の出入るハまるまハ走る 波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波
ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波ハ波

てミナトこいしのうら又河内もあるこゝ
ハ山も水と海のつき皆ワメリといふの品
海也とうなのことくふるこの作
関　セキト　セキトハ塞セトハ不ル要路を塞て
敵等を防ぐ為ニ設ル者也天皇大寶二年
よりはじめて関塞作候防人を置しとミ
しいとしの申始し分ハ作物也於麻
貢法也ハ彼越前草器を没官ハ同州三守国
を深ハ兵士を差砦まてしとしてうりそ
の

仮城　木ハ也愛発の関をとゝ敦賀
近江也愛発関ハふつ高余置関なり
ハ山しなるとゝ度ハむのことさいハ史括式
ハるよみへしるしい京に志賀さ年候と
りをもるこ要の花をと烽城ハ也
相之ゆ　四十里ハ烽ハ毎烽ハ也寺
烽子を配して至夜所とゆもて候
しもし賊あるて烽よ入り烽ハ放ハ
きはい烟を放ちハ次ハ烟を放ハ
ハ先年一息にして放ハこゝをもを

柵の字清てトフとよいひしこと河内出
言安柵と書して始て高麗人柵及大
和出春日柵御宇年條より出たりと
しかしこれ日本紀に天智天皇
とは大三年二府及ひ三岡に守防の
兵をおくり防人演てセキモトリより是
上世の関寺なりといひしこの道理と
なるへし

城

ヒロ義不詳 古河よりきといひしこの城柵
といひしこれ城の字とも柵の字とも

並に清てきといひしこと城柵二字を用
合てもきと演りるも 古河よりきといひしこの限りなし垣墻かとも
いひ関塞とセキとも内外とも汎れの義とも城柵を
日本紀に神武天皇八十年師と戦ひ
ひしに皇師仰城塞を城田といひしと
志賀志忌しこの柵て城の字なしこれ
とは垂仁天皇紀に皇后の兄狭穂彦牛
及て稲城に籠りしとしよ事みし
て積橋仰城其聖不可破比譬稲城也と
志賀志忌しこの柵て城の字なしこれ
並に清てきといひしこと城柵二字を用
合てもきと演りるも 清水

ら事なき事況とは世の事いと洋よ
ろしくしられおもしろに仮稲城とのこと志保し
て積稲仮城ちとしの事いろくすたの件
ゆイナキさいひしとしの成智天皇紀よ
縣邑主首京縣主稲主とくしく即是
こし稲主とは後よ屯倉をもうれ屯倉
ソフトとしてこと事とこしめられしこ
とよ稲主の事と言はしのとこれ
とこそ稲主といひしい祖稲と言
積むかなれい斬とと言ひ地とと言まて

盜賊水火の害あよ件よ 狭穂彦王の
捷らとしかこと制のことなるまいこと代よ
イナキ仮城とるといひし後よ漢字と
ひて喜事をこちいひ及て事と城とこと字
狭穂の事とこと義も同しまれと城の
字を信用しよりて遊て稲仮
城なるよ説も記とし椎君天皇紀に
入て根使主とし不の稲主崇
峻天皇紀に入し物部守屋大連の捷し
稲城とこと言是に同し 狭稲彦王の件
日本紀よ

[illegible]
不ル意ニ天皇ヲ[illegible]ナ内皇后ノ兄狭穂彦ト
忽横稲作城ヲ築キ石可破比理倭城ヲ踰ヘ月不降ヲ作
悲シモ稲作城ヲ築キ皇子巻ハ別命ヲ招キテ城中ヨリ入ル天皇
軍ヲ差シテ城ヲ囲ミ城中ヨリ和ヲ白ス居
ヲ[illegible]ムサシムル間田狭ヲ[illegible]ル皇后
皇子ヲ抱キ[illegible]城ヲ踰ヘ出ヒ[illegible]ヲ遂テ其
[illegible]ヲ[illegible]ル城中ヨリ[illegible]
[illegible]年ノ[illegible]ヨリ記
秋九月丙戌皇后母兄狭穂彦謀反ス十月己
卯新王興皇后ヲ[illegible]城中ニ入ル[illegible]
[illegible]ニ天皇ヲ[illegible]ニ軍ヲ[illegible]
て急ヨリ攻ル[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ[illegible]
[illegible]ヲ

へて殺さるゝ船橋を作りて皇城より
出でゝ東へ渡りしもの也 要書に信西伝書に
はるさん年中炎上の事を載せ信西の城を稲城とつゝて
築城なりしなる船橋を造りて渡りしなるに
なおもの城を造りしなる説もあるなり
さて扨は皇極こゝに記よ義我こゝに於て東夷
子孫の外城柵所作庫更起亦於畝傍山
東方沢為城起庫儲前為城と云て是代
城といいしもの刎洋よりこゝに於て中
大兄の皇子彼大臣の入廉を深しまい即入
侍無為城と云こゝに中大元王子即位し
三年 即元天智天皇の侍年号也 是歳於対馬壹岐筑紫

筑紫国を修又築城紫より大堤貯水曰水城
を作長門城筑紫讃岐を射る事の如き
城城築し水又大和国を安城を築き積
穀與治をしこゝに山城国より二
人あり唐国より四河し百済を救る唐国
ちろほしこゝ国しなる事しこゝの後代
と或ハ築紫城と築れ或ハ大宰
府としてこゝの城を修しなれ或ハ
言安城を修れ東北西の城保
より守衛の人をもこゝ事をしこゝ

城もいたるところに廢されたりけんま
ぢ元正天皇養老三年のみ俗説ハ出の
安部磐城等田村の城を修らるゝ事ハ
へしハ西邊の城堡を廢さるゝ如き
聖武天皇天平年中陸奥守人を修え
き蝦夷防人を修められたるハ諸城院
に廢さるゝ事なくして殺られ又柵
といひしものゝ孝德天皇白雉年造渤海足
柵を柵戸とえしを東北方の地より柵造
らるゝの始ちる渤海足ハ高句麗の後裔なりと

元四天皇和銅元年の秋越後出羽
小出羽郡を建んを養老よりまて
ちを陸奥守と許され二年の夏令陸奥運
送無首出羽柵五年の秋始て出羽柵
を北道の蝦夷ハ陸奥ハ
こちらを陸奥ハ陸奥の民を選して
出羽柵戸を配ちを陸奥出羽の
にあるこの柵を史よりしれもく
なるを陸奥ハ陸奥並蝦夷なるよ
ちを文城郡多賀郡ハ陸守府將軍大

也紀氏東人神亀元年築城而之外史ハ天智梱と名ケ城梱と名ケ古阿ハ
直ニ有也ハ又ハ阿ひさ可ハ古字也
俗名称ニ出ル雄物秋田の二城を
神みくしれたもまたもしこをてれ
城ハ廃せらるるとすんて歌ある討の事
ニ也ニ有りていハ海ハ海ハ有ハ事
始て海ハ及てと言ふを三輪の也
してあり法をさ法ハ西を法もてを事

とし又さ法ハ形して法真出羽国の
出ハ有りを出ハ有りを出ハ有りの形のしてつ
もしわしいさ毎ハ有りを事ハ有りみく
ら今ニ九紀名ハ法歌人在国於城僅四安
宝せよしいよ文ハ有ハ有ハ城梱有るを
いひしいの意のハ義もやあるんハ堡ハ有ハ梱
のことしを
城字法て三口ハ
サえといふとさを法東ハ方ハ
出ねん俗名およ墻ねのある梱の字ハ
收め法もて古のまに
サりといひて説文の

偏要所ことゝいふ程やうきしい日和紀ゟ梅
字ゟ清て
也陳の字清てこゝやつとゝいふ事いとゝよ程し
わ京清てサこゝといひしい百濟の方ゟこ
倭名抄ゟ稽の字清てやうちといい城上
守禦樹と注し庫の字ついこゝりこと清
み清軍器之庫ゝ庫ゝ倉令を引とり日
和紀ゟ兵庫ゟ兵庫の字並ゟ清てヤ
りうといふしやとゝのい茶也りうい置之
古況よりうと
いひしるゝ 蘇我馬子大臣の城紀庫儀

茶とゝこゝ郡城之又倭名抄ゟ整の字
清てホサキといひ世事字義を引て遠
水長ゟ坑也と注し字ゟ和りと注ス
也キとは限こ義ゟ後我馬子大臣宮地ゟ城
とゝこゝものゝ郡人ゟの城こ 説文城地の高
を注とゝいふとゝこゝ
色信かうホリとゝゝ又日和紀をりて營
清てりホリといひて軍營也と注ぶい水
草舍我馬ゟこゝこゝ義ゟ詳又雜也
立城を引て助鋪ハコヤ一りよこタキヤとゝ
如衛士屋也といひしハ清ゟ京師の簾ゟ

いひしものさいとこうこうとつくりて京の栄と
この事は漢土の代のはものつくりことときしものこの海を管造の事なり
所よ其材と案してコヤといふものなり
はなるものをいふ事なるべし

都　こやこそ天宮也

いひしいはし天宮の文字のかたちの
この事大宮をもるといふごとし京の字
漢事も又日城の字又漢てこやこといふ
皇城京城をいふものの義也　天武天皇八年
のみ初て門於竜田山大江仍那波蘆屋
城と云しいはる羅城といふ事の始なり

漢にも羅城ともいひしこれ今俗
の郭なるべしよもの事なり京の字古訓と志
也といふ義又詳なりけれとも思
車をとりこしとよもの又志ろ口とは海と田也陣田里田を
いふ事のこれ田繞ルの義なり郭とものわとしの里字の
義も城と田繞ルの義なり郭とものわとしの里字の
鄙　こは義不詳上代事は至尊を稱する日を
もてしを立ものを稱するに天をもて
寸義源をはしてアマサカルこなといひしは
天を離る事の意日の御蔭なるべし
義なるべしさいこなとは日毎こ後よりと
得て事の字漢てこなといふ旧事紀日本
紀よ下照姫の歌と今号(ナツク)夷田(ヒナツ)と志給れ

アヽサカルニナとハ天離事也と釋日本紀
よりて注せしかこれ也 田舎ヨリ出テ日本紀
ヨリ田舎の田歌
ヨリ無此アヽサカルニナとハ田舎の
日もさかるとろしとあるこれ上代のそれ
の義よりて物を内ある人しもかるを田舎
イナカちとハ物の事ハニナとハの流の訛せしるゝ
是ヨリ本文ニ
○清人を上ニシとハ清人を上ニシとハ
内ふ人しを上ニシとハ事ハ神武天皇記久米歌の
と釋とあるとて日本紀よりて東の字
落て上ゴスとハ注せれ賊戎の字又落て
上ニシとハ上ニシといひ上ゴスとハ
之流れをしのこふて矣ちれ用ふ
あゝ雪田流ちて彼為人賊落也
て賊のことをかるれなるをかるハ賊
事落ちハ上ゴとハ渡人の書る師作也
之ちれをしの郡所しもくて是しの稱事
芳洋ちの欲神武の巻欲ハ上ゴとハ
ちくて彼為事をさしのハ
事の賊のもさふ仇ふ賊ハいのものを上ゴといひ彼為
ちをちこちを
ちをしも
倭花ふよりを鄙の古注てアヅマとハ
田流よヅといひしい拙人とハのこと
ハのこアヅマとハ東方の地をさしなこ
を鄙の字東方の人をさしてハのハ

いこもかはもとしなし夢

坊　一ヶ

市　イチ　俵屋分おなじ字茶屋をとりて坊い
ゑ屋し又村坊と野ゑ裏ゑしるを俗せう
を清て一ヶ所といひしを屋ゑの屋ゑ
茂にすうゑ又ゑ所の田ゑとしゑを
所といふ田しゑを俗ゑ所の字を
田ゑ津にし成ゑ市清てイチと
いふイとハ集ゑ千を道ゑ百貨裏里ゑ
里ねるゑをいふ又俵ゑ分ゑ宅ゑ

肆郭商廛所宸字の字をねて肆清て
イチグうといふ陳物宸ゑを又ゑ所ハ明れ
市宸物を陳ゑ物の習して後の俗ゑ
ゑ物ゑといふ初ゑ邸商ハ俗ゑ停賣取貨
ゑ宸ゑ津屋といふを俗せゑ宸俗ゑ
同屋といふのゑ沢ゑ家いしゑ宸
ハ俗ゑ東西町といふをゑ笠賣物食や
と俗ゑゑゑ宸ハ巷ゑ商ゑ所
食やと俗ゑ宸清て又ゑとゑ所ゑ
切と俗衛市の俗ゑ花ゑて商賣ゑ里裏

つまて交易する場を市といい客商と
ともに家不を郎家といい生商の家不
を店家といひ主あるを使ふる不を雇と
いひしこと毎坊の門を出て坊門といひ
を後佐を針灸（ハリキュウ）といひ之針灸とは
門場をよる針をすりあるをさまをを
ぎまして踏まを年を拔ヤ者をといひ
ゆり 櫃裏おりこの

已上四都

国立公文書館
National Archives of Japan